

校長式辞

雲南の地にも、確かな春の足音が聞こえてきます。蒼雲館の紅梅も、何度か雪をかぶりながらしつかりと力を蓄え、今朝の雨風にも負けず満開に咲き誇っています。

本日ここに、島根県立三刀屋高等学校 第七十三回卒業証書授与式を迎え、一三五名に卒業証書をお渡しすることができました。卒業生の皆さん、保護者・ご家族の皆様、誠にありがとうございます。

昨年二月末、全国一斉休校という突然の報道に、「卒業式はできないのか」と衝撃が走りました。しかしすぐに、「どうすれば式ができるか」に向けて皆が動き出しました。形こそ変わったけれど、無事挙行できた喜びと感謝は忘れられません。今年もこのような形となったのは誠に残念ですが、卒業生の皆さん、たとえ見えなくても、あなた方に注がれてきた愛情、今寄せられている温かい祝福に、どうか思いを馳せてください。

昨年の式で、私は一つの言葉をもとにお話ししました。ある生徒が口にした「当たり前は当たり前じゃない。一つ一つがありがとうなんだ」という言葉は私の心に強く残り、一人のアスリートの姿が重なりました。当時、闘病生活から退院したばかりだった、競泳の池江璃花子選手です。

「ここにいることが奇跡、生きていることが奇跡だ」という気持ちに変わりました」と述べ、次の目標に向かって踏み出した同世代の彼女にみんなも負けるな、そう呼びかけたい思いでした。

しかし、あれから一年、私は彼女から再び大切なことを学びました。この一月、彼女の成人式を機に放映された番組で見たのは、壁にぶつかり続ける彼女の姿でした。中でも胸が痛んだのは、「どうしても元に戻りたい自分がある。でももう戻ることはできない」とい

う葛藤です。誰よりも速くゴールできるのが当たり前だった自分が今は誰にも勝てない。その現実を突きつけられてもなお、泳ぐことが好きで離れられない。葛藤の末、「これも全部自分の人生なんだと思えるようになりました」と微笑む姿は本当にまぶしいものでした。

いま高校生活を振り返るとき、皆さんにはどんな場面が浮かびますか。勉強、行事、部活動、仲間の顔。でも決して晴れやかな場面ばかりではないと思います。壁にぶつかり立往生したこと、今だってもがき続けていますという人もあるでしょう。

ある方がこんなことをおっしゃいました。

「壁にぶつかったら、とりあえず壁の前でウロウロしてみるのだ。誰かが助けてくれるかもしれないし、そのうち壁が勝手に崩れるかもしれない」* 皆さんにもきっと、そんな「誰か」がいたのではないのでしょうか。そしてこれから進む道も、壁の前では決して一人ではなく、ウロウロするあなたと共に誰かが必ず見つかると思います。いえ、あなた方が手をさしのべる側にもなるでしょう。

失敗も葛藤も、人との出会いもひっくり返るめて丸ごとあなたの人生です。やってみたいことや好きな道、あなたが為すべきことに志を抱き、まだまだ開拓途上の己の可能性を追い求めていってください。

私たちはコロナ禍という一つの転機にいます。生活様式や価値観の変化は避けられませんが、戻せないものがあるのは事実でしょう。一方で、この状況下に初めて見えてきたこと、大切な発見もあったはずで

命を守るため奮闘する姿や陰で支える姿、カチコチになりそうな心をほぐし、活力を与えてくれる芸術やスポーツの意味。私たち教職員にとっては、生徒が戻ってきた学校、あの朝の感動もそうです。「これから大変な日々が続くだろう、でも今日から三高みんなで行っていくんだ」。あの思いは忘れたくありません。

卒業生の皆さん。最上級生として、この前例のない日々をよく辛抱し、前を向き、後輩の手本となつて歩

んでくれました。部活動や生徒会でバトンを受けた下級生が、「先輩たちの分まで」と心一つに邁進している姿を見ると、皆さんが残したものの大きさがわかります。皆さんの爽やかな挨拶と笑顔に私自身どれだけ救われたかわかりません。

保護者の皆様。家ではきつと、学校では見せないお子様の姿があったことでしょう。不安や悔しさに涙が出たときも、じつと背中を見守ってこられたことと思います。寄宿舎でがんばった人も、家のありがたさをかみしめつつ、たくましく成長したと思います。

三年間、学校と手を取りあい、力を尽くしてください。誠にありがとうございます。また、若者に多くの刺激とチャンスを与えてくださった地域の皆様、心から感謝申しあげます。この日々が、いつか皆で語り合える共通の財産となりますように、心から願っています。

まもなく雲南の町はとりどりの花と緑に覆われます。「さくらの花かげ 稲田の前」と歌われる学び舎の景色と、この地で結ばれた絆を胸に新しい世界に羽ばたいてください。

三刀屋高校 総合学科十五期生。皆さんの前途に幸多かれと祈り、はなむけの言葉といたします。

令和三年三月二日

島根県立三刀屋高等学校

校長 倉崎 千草

*「壁にぶつかつたら・・・」東京大学教授 玄田有史氏（松江市出身）の講演の一節からいただきました



答 辞

頬を撫でる風が和らぎ、春の足音が徐々に近づいてきました。本日、私たち一三五名は思い出が詰まった三刀屋高校を卒業します。昨年は、私一人が在校生を代表して卒業式に参列し、この場に立ったことを覚えていいます。今年も新型コロナウイルスの影響は大きく、卒業式を開くことも難しい中、こうして卒業式を挙行していただきますことに、心から感謝申し上げます。

期待と不安で胸が一杯だった入学式からもう三年が経ちました。一学年十人の小規模校から入学してきた私でしたが、三刀屋高校の明るい雰囲気のおかげで、すぐに馴染むことができました。そして、総合学科の三刀屋高校ならではの未来創造探究で、仲間たちと探究活動をしたことは、私たちを大きく成長させてくれました。課題を見つける視野の広さ、解決する力や協働することの大切さを知り、目まぐるしく変化する社会で生きていくために必要なことを学ぶことができました。

いろいろな行事の中でも一番印象深かったのは、三高祭です。今年度の三高祭は新型コロナウイルスの影響で計画がなかなか進まず大変でした。計画を立て始めた頃、やりたいと思った企画を実施することが難しく、どうすればよいのか分からない状態が続きました。しかし、毎日、生徒会執行部が集まって話し合いを重ねました。「Maximum 〜三高生の最大幸福〜」というテーマを決め、新しい企画を考えました。上手くいか不安でしたが、生徒の皆の笑顔や、一生懸命な姿を見て安心しました。全力で取り組んでくれた一、二年生、全校を引っ張ってくれた三年生、私たちを支えてくださった先生方、三刀屋高校が一体となって三高祭を成功させることができたのはとても嬉しいことでした。そして、絶対に成功させたいと試行錯誤した生徒会執行部の一員であったことを誇りに思っています。逆境をチャンスと捉え、これまでの活動で培った力を生かして、困難を克服した経験は、今後の人生の糧になると思います。

私たち三年生は十二の文化部、十二の運動部にのべ一二二名が所属し部活動に一生懸命に励み、皆が様々な困難を乗り越えて大きく成長しました。私は野球部に所属していました。三年前「甲子園で校歌を歌う」というチームの目標を聞いた時、その目標を達成することの難しさに気づかず、甘い考えを持っていた自分を、今では情けなく思います。チームに迷惑をかけた時には、先生や仲間が指摘してくれました。そのおかげで、今の私があると思います。明るいチームで励まし合ってきたからこそ、最後まで部活動が続けることができました。沢山の思い出がありますが一番印象に残っているのはやはり最後の夏です。三年生になり「甲子園に行くんだ」と本気で思えるようになった時、夏の甲子園の中止が決まりました。失意の中、それでも前を向くしかありませんでした。夏に優勝して、保護者の方や地域の方に恩返しをしようと最後まで「やり切る」ことを決めました。私は相手チームの分析をする役割をもらい、配球などを調べました。それを伝えた時、チームメイトが「ありがとう」と言ってくれたことでチームのためになることを一つできたと嬉しく思いました。そして、戦った五試合は「やり切る」ことをテーマにしていたチームらしく、最後まで諦めずサヨナラ勝ちを重ねました。目標の優勝まであと少しのところでは負けましたが、この大会のことは一生忘れないでしょう。沢山の人と出会い、支えられて野球ができたことに感謝します。レギュラーになって活躍することはできませんでしたが、自分にできることは何かということなどを考えてやってきた二年半で私は多くのことを学び、成長することができました。監督を始めとした先生方、コーチの方々、チームメイトに心から感謝しています。ありがとうございました。

このように充実した学校生活を送ることができたのは先生方や家族のおかげです。

先生方は、新型コロナウイルスの対策に苦心しながらも、学習指導や進路指導など色々な面で支えてくださいました。勉強や進路の相談をした時には、私たちの色々な可能性を引き出そうとしながら、相談に乗ってくださいました。「友達ではないぞ」と叱られそうで

すが、雑談をして笑いあったことも楽しい思い出の一つです。優しく、時に厳しく、毎日指導してくださり、ありがとうございました。呼名されたら、この感謝の気持ちを込めて、大きな声で返事したいと誰もが思っていたと思います。返事することさえ許されない状況であるのは残念ですが、私たちの声にならない声を聞いてくださったと信じています。

そして、一番近くで支えてくれた家族。いつも私がやりたいことを自由にやらせてくれました。辛い時、悩んだ時には、助けてもらいました。沢山迷惑をかけたので次は恩返しする番です。そのためにも、まずは自分の夢に向かって頑張っていこうと思います。これからも温かく見守っててください。

在校生へ直接伝えることはできませんが、伝えたいことが一つあります。何事も「やり切る」ということです。部活動で何度も言われたことです。悔いのない高校生活にするのはとても難しいと思います。しかし、一つひとつやりきれば、後悔することは減ると思います。自分の目標に向けて、残りの学校生活も頑張ってください。応援しています。

最後に三年生の皆へ。私たちは本当に色々なことを経験しました。受験生として休校期間を過ごしたこと。高校最後の部活動の大会が無くなったこと。その辛さを分かってくれたのは友達でした。皆でした。皆がいたから、困難も乗り越えられました。私は三刀屋高校に入学して皆さんと出会えて、本当に良かったと感じています。

私たちは三刀屋高校卒業生としての誇りと沢山の教えを胸に新たな世界へ羽ばたいていきます。この先、どのような困難にぶつかっても、乗り越えられると確信しています。

私たちに関わってくださった全ての方に改めて感謝を申し上げます。そして三刀屋高校の益々の発展を心からお祈りし、答辞と致します。

令和三年三月二日

卒業生代表 吉田 千之輔